



TITLE:

表紙ほか

AUTHOR(S):

CITATION:

表紙ほか. 天界 1943, 23(267)

ISSUE DATE:

1943-09-28

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/168659>

RIGHT:

理學博士 山 本 一 清 主 幹

天 界

(第 23 卷)

第 2 6 7 號

昭和18年

本 號 要 目

口 繪：ペルセウス座の二重の星團③

卷頭隨筆：恒星時の時計など山 本 一 清 281

月蝕の豫報計算 (3).....熊 切 一 男 285

今年末の火星の近接と其の物理表〔紀要86〕(1).....山 本 一 清 289

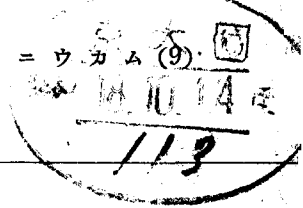
觀測部月報：太陽・流星 298

標準天文用語表(19)..... 296 | 昭和19年＝學曆1944年(略曆表)..... 294

十月の天象..... ④ | 編輯室より..... 300

十一月の天象..... ② | 會告・公告.....② 284

別ぐみ頁：球面天文學要綱〔3〕..... S. ニ ウ カ ム (9) ⑤



本部：田上天文臺

東 亞 天 文 學 會

事務局：滋賀縣 堅 田

1943年

十一月の天象

Himmelserscheinungen im November, 1943.

秋の流星に賑はふ筈の十一月であるが、天氣が假りに好くても、月光の關係上、觀測は殆んど望みが無い。しかし黃道光は月の初めと終り頃には都合よく見えるだらうし、又、全月にわたり、みごとな遊星面の諸相や、種々の變星、二重星なども、望遠鏡の持ち主を喜ばせるだらう。

太陽は天秤座を運行中で、8日には“立冬”の節となり、43日には“小雪”となる。地球への距離は漸次近づいて来るが、勿論、著しいものではない。黒點の出現は一般的に微弱だけれど、時々豫想外のものが見えるから、油斷はならない。平均太陽は眞太陽の東にあつて、“陽差”は4日に最大(+16:22)となり、其の後は減小する。

月は、5日が上弦、12日が満月、20日が下弦であり、28日が新月で、この日は舊十一月朔に當り、月相60259期が始まる。

水星は、11日に上合し、同時に降交點を通過し、21日には遠日點を通る。全月を通じて、地球からは遠く、太陽に近いため、觀望は困難ある。

金星は立派な曉の明星で、4日に昇交點を通過し、16日には太陽より西方へ47°の極大離角となる。餘りに明る過ぎて、黃道光の觀測を妨げるだらう。飛行機と見誤らないやう、注意すべきである。光度は初め-4.2、それから漸減。

火星は牛座にあつて、前月末から逆行を始め、視直径は16"を、光度は-1^mを越え、愈々觀測の最好期に入る。毎夜、21時頃から、夜明けまで、北半球上の我が日本の頭上にあつて、興味は盡きない。28日は地球へ最近距離である。

木星も亦觀測の好期である。毎日夜半以後の東天に、金星と其の光輝を競ひ、視直径は35"内外、11ヶの大小衛星のうち、4つは小望遠鏡でも見える。

土星も牛座にあつて、火星や木星と共に、曉の高い空を飾り、その誇らしい輪の美形は、100倍以上の望遠鏡者を歡喜せしめる。光度は0等、視直径は18."5。

天王星も亦同じ牛座で、カ星の南方1°ばかりを逆行中。肉眼には見出しにくいけれど、吾等の“年鑑”(天界259號)の第20頁にある圖を頼りとすれば、双眼鏡や小さい望遠鏡によつて容易に見つけられる。光度5.9、視直径4"弱

海王星は金星と前後して東天に現はれ、その位置は“年鑑”第22頁の圖を頼りとして見つけ得るが、之は7糎口径の望遠鏡を必要とする。

冥王星は11日に東留。世界一の望遠鏡を要す。

新彗星や新星の出現を見落さぬやう、毎夜全天を搜索すること。

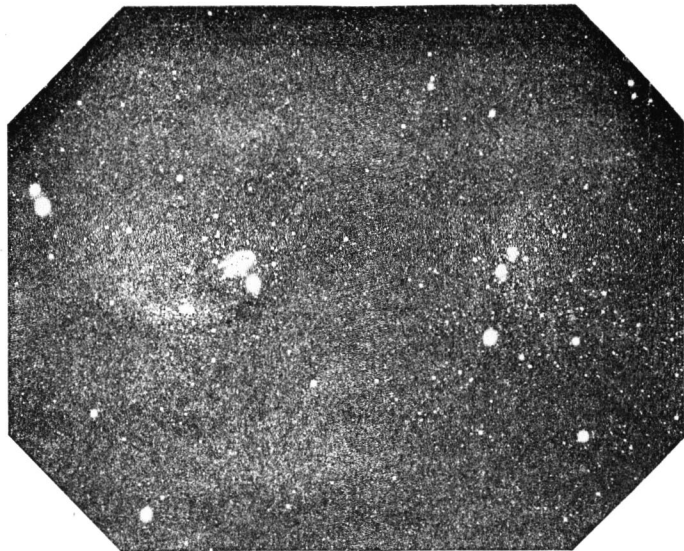
(18—7—31締切)

會員に關する報告 [×印は觀測部へも入部]

【入會者】	阿波根朝宏(滿洲)	王 鐘 遠(中華)	岡田 智(西宮)
西村 尙美(神戸)	×高木 嘉雄(東京)	×北村 得夫(東京)	柴垣 健(東京)
沖 房之助(堺)	小田島 晟(札幌)	中野 仁士(東京)	秋山 潔(川崎)
×横井 俊雄(京都)	×石井 共平(西宮)	高木 四郎(濱松)	櫻井 芳裕(東京)
×平山 芳雄(大連)			

注意：御移轉の節には直ちに(前住所をも並記して)御通知下さい。觀測部の方は其旨附記して下さい。

[東亞天文學會事務局]



ペルセウス座の二重の星團

(ヤーキース天文臺にて撮影)

秋十月の夜半に北天に高く中する此の星圖は、ペルセウス座とカシオペア座との境界線上に當り、月光の無い夜空には肉眼にも明らかに見えるもので、北緯 56° 、赤經 $2^{\text{h}}10^{\text{m}}$ の邊に輝やく恒星の2群であるが、吾々の距離は8200光年で、銀河の一部をなしてゐる。

向つて右(西方)の星團は“h”と呼ばれ、N. G. C. 869、又、向つて左(東方)のものは“x”と呼ばれ、N. G. C. 884といふ風に、ドライヤの目録に記載されてゐる。二つの星團の間隔は約 $30'$ である。

1943年

十月の天象

Himmelserscheinungen im Oktober, 1943.

この十月は、珍しい**鵜**での**遊星が早暁の東天へ**移つて了つて、ために、日没後の西天は實に淋しい。星座も亦この季節は輝かしいものが無い。——まづ**水星**は九月末に下合して、十一月11日に上合する。その途中で、十月11日に太陽より西方へ 18° といふ極大離角を現はすから、朝早く起きて之を觀るには最も適當な時期である。黃道と地平線との傾斜關係も、北半球に於いては非常に良い。(その反對に、南半球では不便であるが)

金星は最も美しい暁の明星ぶりを發揮し、-4級の光輝で、東天を壓してゐる。特に十月13日前後は極大光輝に當るから、白晝にも肉眼で見える筈。

火星は牛座の東部を順行中、但し、運動は漸次緩やかになつて、月末には停留する。それと同時に、暫し土星に近づいて、この赤い星と、土星の青白い光とが高い東天に並列する様は、肉眼に面白く、又、望遠鏡裡に於いても興味をそゝるだらう。視直經は $12''$ を越え、専門觀測が始まる。

木星は獅子座を順行中、太陽の光芒中から漸く抜け出でたばかりで、高度は未だ低いけれど、光度は大きいから、金星と共に空を賑はすだらう。但し、望遠鏡で衛星等を見るのには、まだ低くて、像は良くなからう。

土星は牛座にあつて、初めは順行し、10日に停留となつて、その後は逆行に移る。望遠鏡による眺めは頗る良い。チタン始め、幾つかの衛星も見えるだらう。

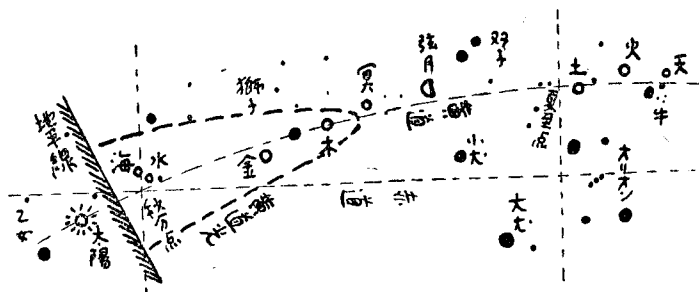
天王星も牛座で、 ϵ と κ との間を逆行中。光度は6.0であるから、双眼鏡で見える。

海王星も秋分点附近にあつて、暁の星だけれど、太陽と會合直後なので、観望には適しない。冥王星は、蟹座にあるが、最大級の望遠鏡で見えるのみ。

月は7日に上弦, 13日に満月, 21日に下弦, 29日に新月である。これがため、折角のオリオン座流星群の観測は月光に妨げられるだらう。

太陽は乙女座を南下中、9日は“寒露”，24日は“霧降”の季節である。

黄道光 は、一年中の今が最も良い見頃であつて、曉空の東邊を賑はす。



天 界 第 267 號

昭和18年9月26日印刷

昭和18年9月28日發行

〔定價(停)金40錢〕合計金43錢
〔特別行為税相當額3錢〕送料金1錢

編輯兼發行者 } 滋賀縣滋賀郡真野村大字真野513

（東亞天文學會）（振替大阪56765）
（代表者山本一清）
日本出版文化協會第2種會員（第220038番）

印刷所 } 京都市上京區上樺木町千本東入

眞美印刷所 橋本岩太郎〔電西陣3702〕

配給元 東京市神田區淡路町二丁目九番地

日本出版配給株式會社